青の時代

山下雅人

青桐の幹は葉よりもあおざめて何苦しくて風に吹かるる

草原に君は仰向きわれは臥す空の余白は余白のままに

はろばろと深海平原越えてゆくシロナガスクジラ思う夜ふけや

大教室小教室にも君居らず大学とはさまよう森か

やました・まさと　「短歌人」同人、現代歌人協会員。1955年生まれ。79年中央大学文学部卒。85年「現代短歌における“私”の変容」で第3回現代短歌評論賞受賞。歌集『水上の雅歌』、評論集『世紀末短歌読本』など。

アリバイのなき一日よ青嵐吹き抜けてゆく駅に降りたつ

八月十五日

ふかぶかと祖国の夏を仰ぐかな積乱雲は青雲ならず

青葉にまた青葉重なり透明に近づくものを〝君〟と呼ぶべき

日没に啓(ひら)かれてゆく思惟ありて青桐の葉は青を深めつ

無重力に近づくごとき秋の朝　蟬のなきがら砕かれゆきぬ

この夕べ投網(とあみ)をうちて捕えんかアカネアキツは他界より来つ